

しんらんしょうにんいぶん にそんだいひ
親鸞聖人遺文 二尊大悲

種 別 小松市指定文化財 古文書
指定年月日 昭和48年11月2日
所 在 地 寺町(本覚寺)

二尊大悲は、諸説あるが親鸞聖人が80代の時の遺文とされ、6段で構成される。

二尊大悲には、まず源信⁽¹⁾と覚運⁽²⁾の2人の天台宗僧の著した教えが最上段に、釈迦如来と阿弥陀如来の、それぞれの大悲⁽³⁾の教えを韻文にした2つの大悲偈とその注釈が中央2段に記されている。また、下段には浄土真宗の最重要經典である「無量寿経」の序文を引用し記している。

2つの大悲偈は、親鸞が、釈迦如来と阿弥陀如来の二尊の立場を踏まえ、両者に共通の大悲心を仰ぐ親鸞の信仰をまとめたものであるといえる。また、源信・覚運の文引用は、親鸞が長年研究した天台学の粹を集め、研究の集大成を示すものである。

本軸は元々奈良県広陵町萱野の富田教行寺に所蔵されていたもので、いつ頃本覚寺に移ったかは不明である。また裏書には、蓮如上人の真筆であると記されている。

二尊大悲は、本件のほかには、東本願寺蔵の親鸞聖人自筆のもの、西本願寺蔵の覚如上人筆のもの、三重県津市の専修寺の顕智筆のもの3点しか確認されておらず、親鸞聖人の教えを現在に伝えるものとして、非常に貴重なものである。

- (1) 源信：平安時代中期の天台宗の僧。死後極楽に行くには一心に念仏を唱えるしかないと言き、「往生要集」を著して浄土教の基礎を築いた。また天台宗の学派である恵心流の祖となった。
- (2) 覚運：平安時代中期の天台宗の僧。恵心流と並ぶ天台宗の学派である檀那流の祖となった。
- (3) 大悲：仏教の教えにおいて、他者の苦しみを除いてあげたいと願う心。

